

ナルニア国物語

魔術師のおい

9

C・S・ルイス

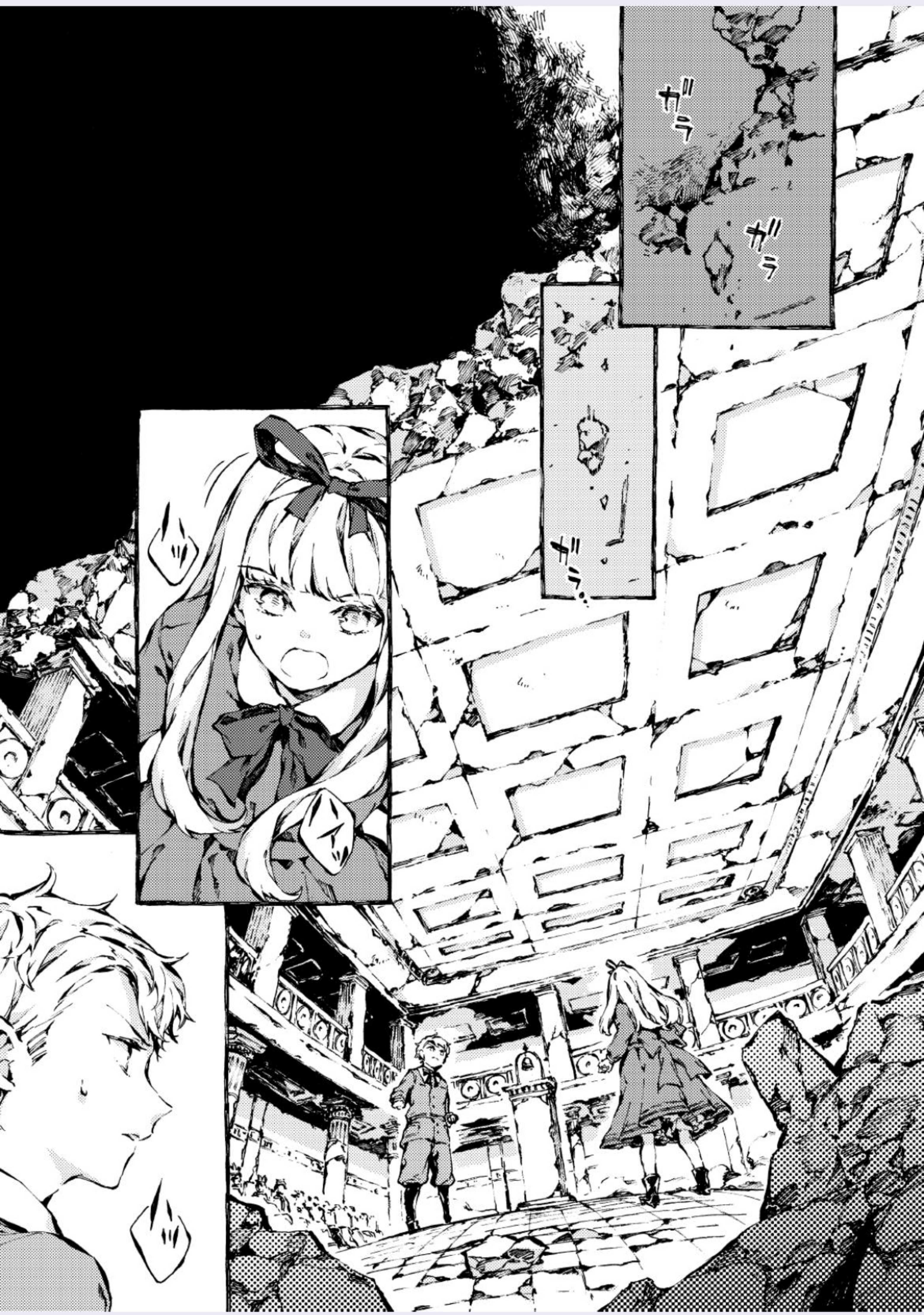
土屋京子・訳

玉樹庵・画

(光文社古典新訳文庫刊)

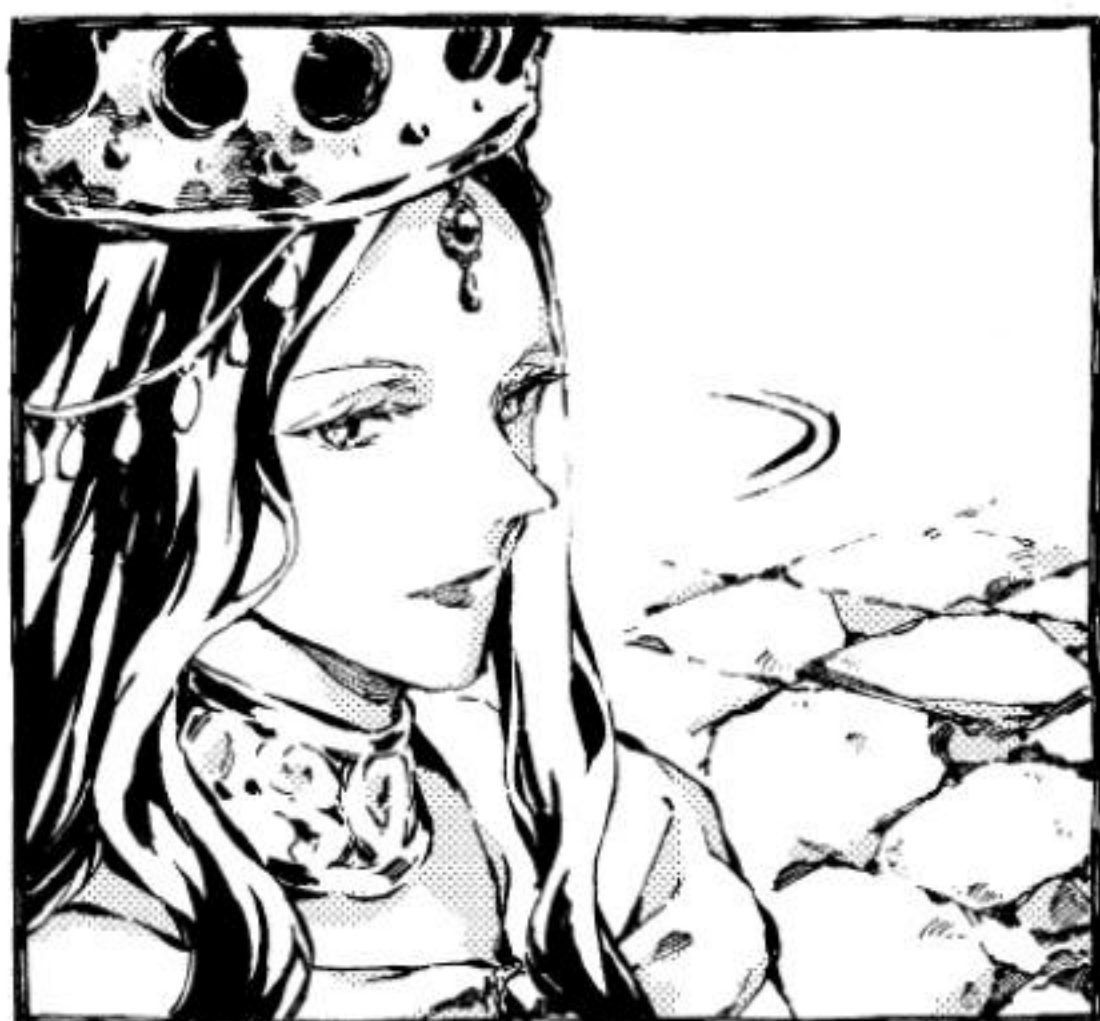
第9話 滅びの言葉(前編)













だが
そちは
たかが小童

それも
平民の子では
ないか

そちのからだに
王族や貴族の血が
流れておらぬことは
一目瞭然じや

そち
ごとき者が
なにゆえ畏れ多くも
わが宮殿に
足を踏み入れたのか?

わたし
たち

ほかの世界から
来たんです

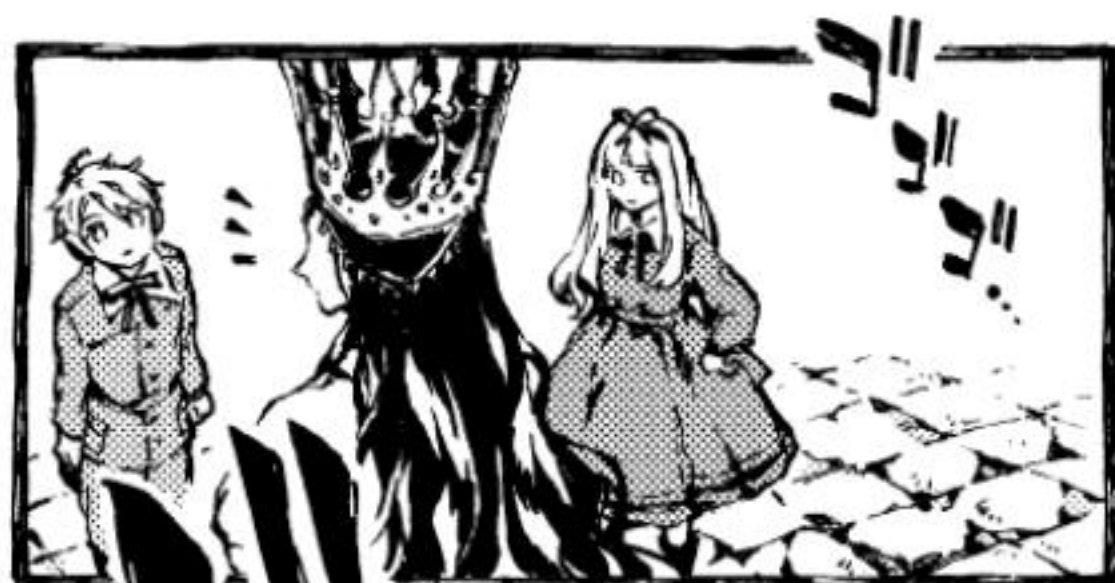
魔法で

くっさも
見て

それは
まことか？

そうです

キッ



……ここはおおいに
危険である

宮殿全体が
崩れようと
しておるようじゃ

数分のうちに
ここを去らぬと

がれきに
埋もれることにな
ろうぞ

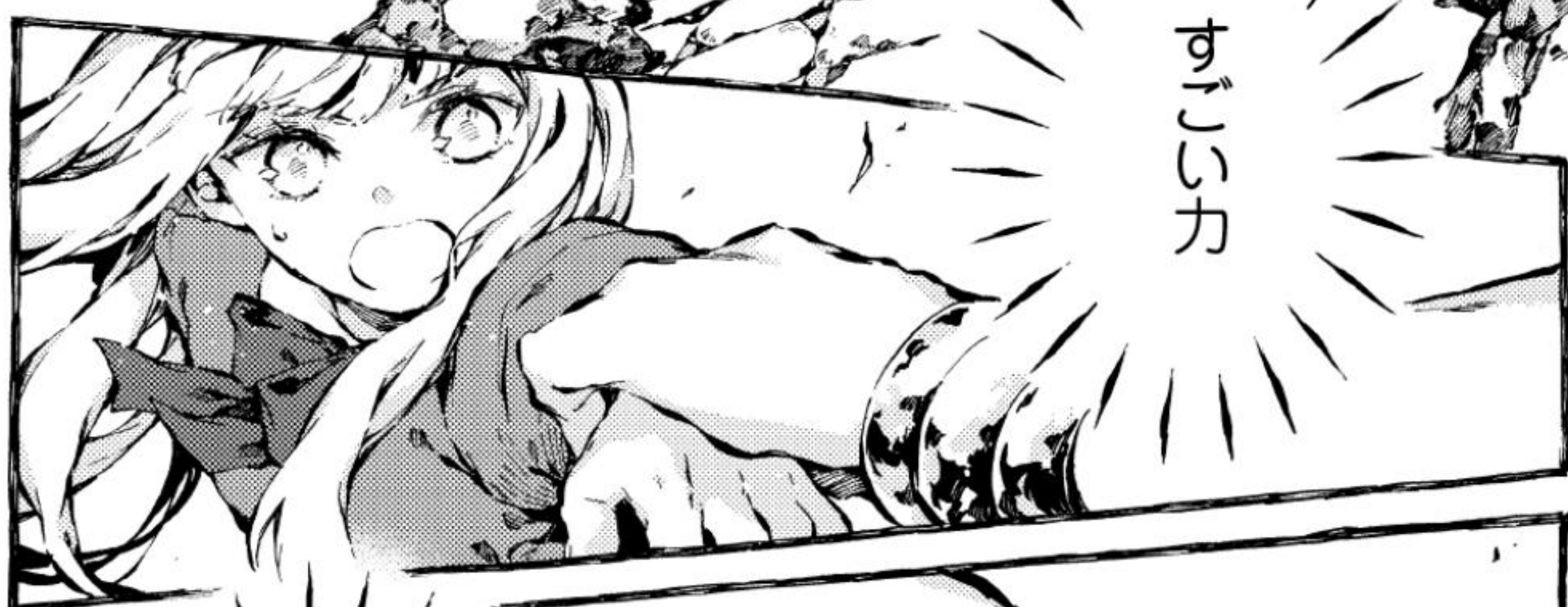
さ

行くぞ



とんでもない
女だわ！

すごい力



わたしの腕なんか
ひとひねりで
へし折られちゃいそう



それに

左手を
握られちゃったから
黄色い指輪に
手が届かないし

右手をのばして
左のポケットに
つっこもうとしても
届かないかも
しれないし

何やってるのかって
気づかれちゃいそう



.....

……何が
あっても

とにかくこの女に
指輪のことを
知られないように
しないと

ディゴリーにも
黙ってるだけの
分別があれば
いいんだけど……

……ああ





ディゴリーと
二人っきりで
話せたらいいのに……！





これこそ
女王と呼ぶに
ふさわしい人だ！



それに強い



この女王は
すばらしく
勇敢な人だ

女王の口から
この場所の話を
聞かせて
もらいたい
ものだ

——あれは
地下牢への
入口じゃ

あの通路の先には
重罪犯の
拷問部屋がある

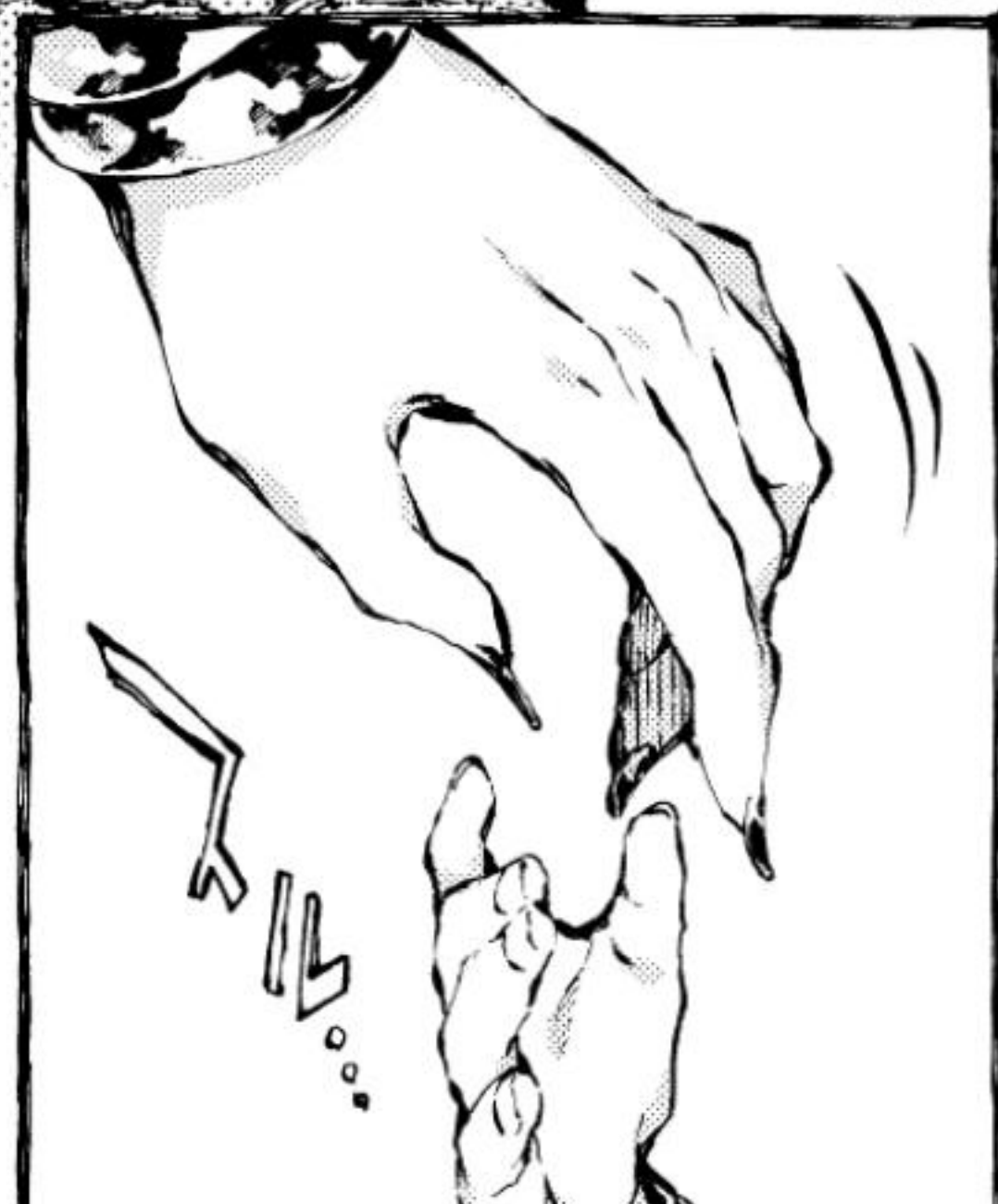
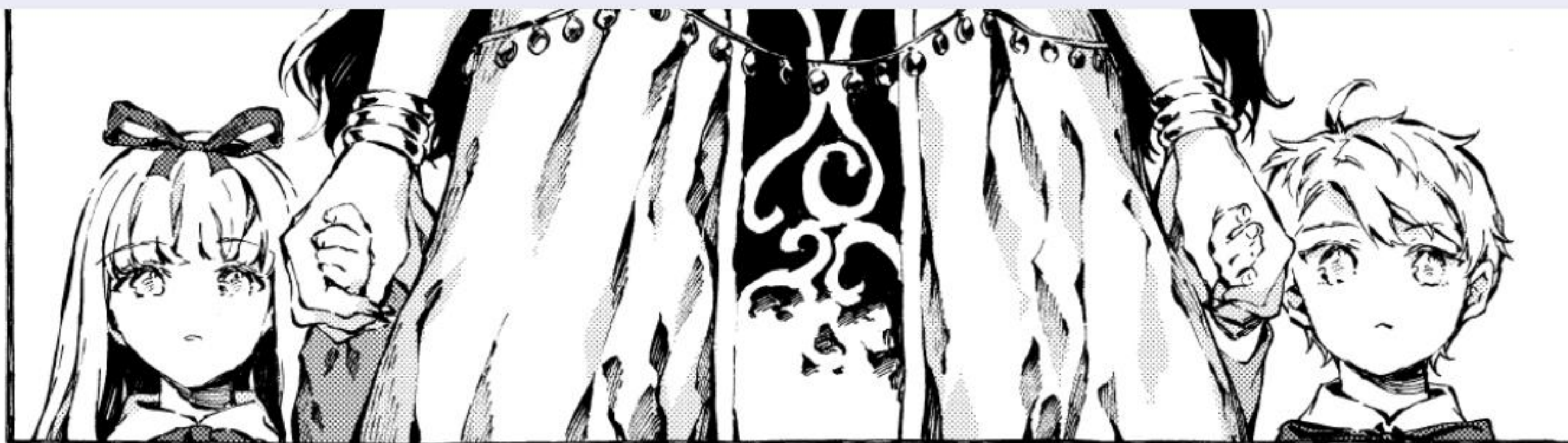
これは昔の
宴会用広間で

わらわの曾祖父王が
七〇〇人の貴族を招いて
宴会を催して

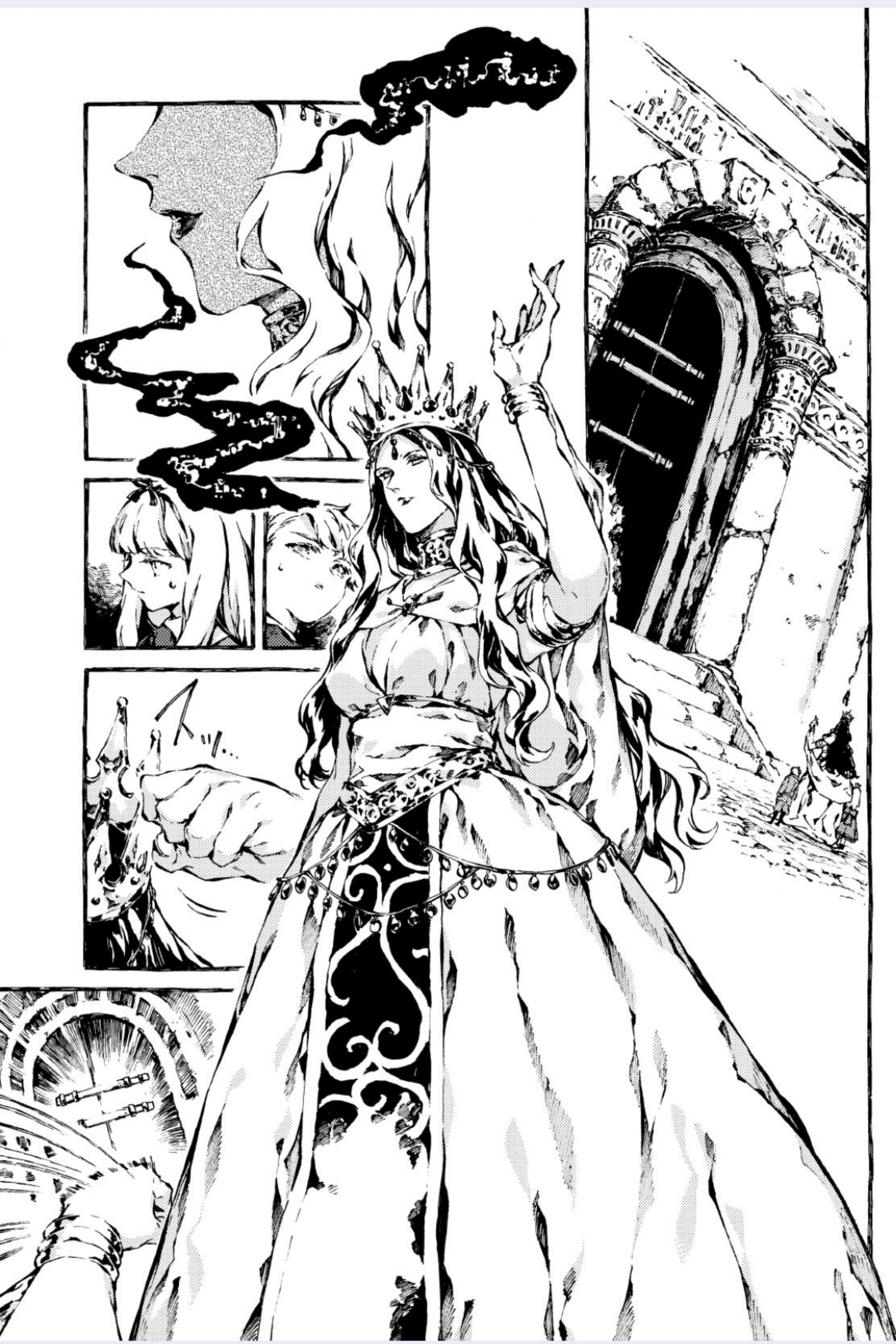
そやつらが酒に
酔うか酔わぬかのうちに
皆殺しにした
場所じゃ

連中め

謀反を企てて
おったのでな



やっと
宮殿の正面玄関まで
来たにちがいない





そちの
魔術の師匠である
伯父とやらは

わらわのような力を
持っておるのか？



…しかし
それはいずれ
わかること

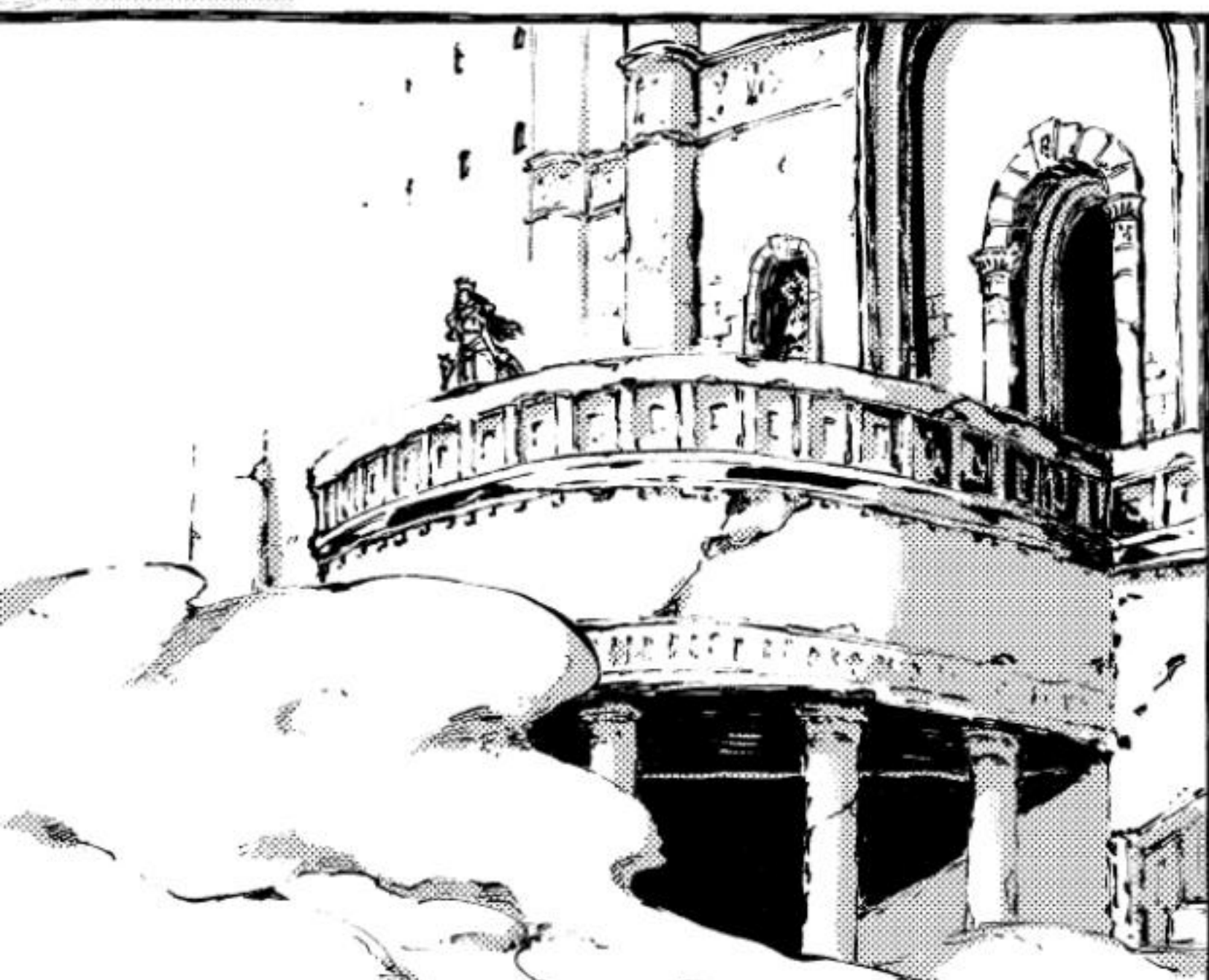


さしあたり
いま見たことを
おぼえておくがよい

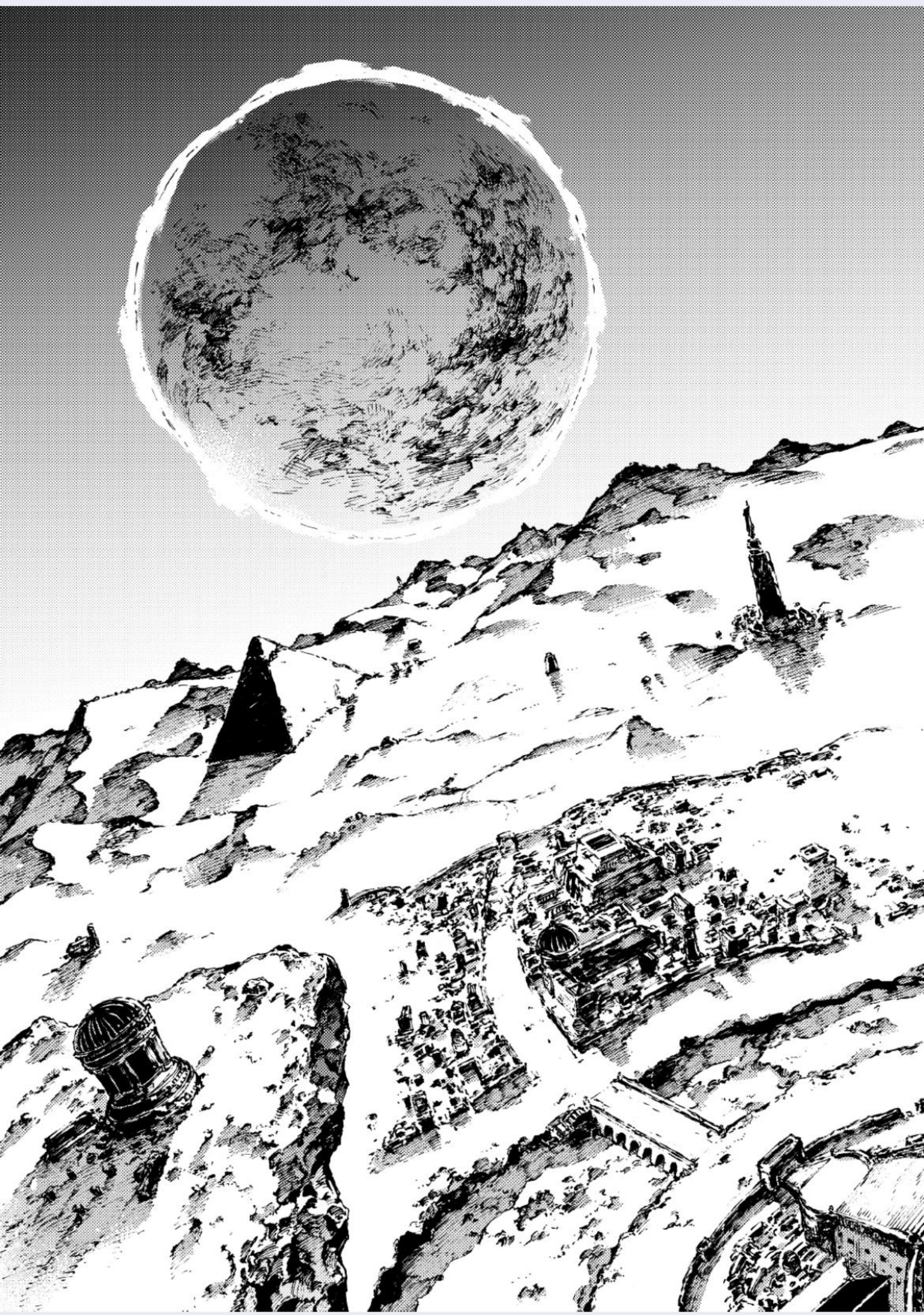
わらわを
邪魔だてすれば

物であろうが
人であろうが

このように
なるのじゃ









しかと
見るがよい



今後ふたたび
人の目が
これを見ることは
なかろう



これが
チャーン
の
姿じゃ

偉大なる都

王のなかの
王たる者の都

世界の驚異

そしておそらく
ありとあらゆる世の
奇跡であった

小童よ

そちの伯父は
これほどの偉大なる都を
治めておるのか？

いいえ……

伯父はどこも
治めてなんか
いな――

いまは
静まりかえって
音もないが

かつて
わらわがここに
立ったころは

チャーンの
喧噪で大気が
沸きたって
おったものじゃ



行進の足音

鞭の鳴る音に

奴隷どもの
うめき声

寺院から
聞こえてくる

いけにえの
儀式の
太鼓を打つ音

車輪のきしむ音

チャリオットの
とどろき

わらわは
ここに立ち……



——あれは
最後が
近づいたところで
あった——

通りという通りから
戦いの怒号が
上がるのを聞き



チャーンの川が
血で赤く染まるのを
眺めたものよ





そのすべてを

一人の女が
一瞬にして
永遠に
消し去ったのじゃ



…誰が
ですか？



わらわじや

最後の女王にして

全世界の女王たる

この
ジェイデイスじゃ